

東洋美術史研究

濱田 耕 作 著

今既『東洋美術史研究』が出来上つて濱田先生の没後、その遺志がよく完うされ、既刊の『考古學研究』『日本美術史研究』と共に先生の論文集が夫々に豊富な圖版を織り込んで新裝の三冊の完成を見るに至つた。かくて濱田先生の最後まで學問が「應モニューメンタルな著作に任げられたことは先生を知る者にとつては感慨深きものがあり將又、我考古學界の發展史上極めて價値あることである。

先生が美術史の分野に極めて足迹の遍ねかつたことは人々の認められた所であつたが、さきに『日本美術史研究』を手にして今更の様にそのことを確認した讀者は今又法隆寺關係の論文をも一括して收めた『東洋美術史研究』に於いて先生の美術史への態度と方向とをはつきり知ることができると思ふ。先生の美術史は先づ美しいものを鋭く直視的に觀賞し文學的才もて之を表現されたものと言ひ得るであらう。而も先生に於ける美の對稱はギリシヤ的な明快なものであつた。これが彼の繁縷な繩文土器を避けて彌生式土器に簡素な美しさを云々され餘りにも規矩にすぎない三代の銅器よりも漢代の漆器に描かれた自由な筆致に美を認められた所以である。さうした一端は「漢代の繪畫に就いて」によりうかふことができる。

かゝる先生の本來の感覺が先づ大學卒業論文として「希臘印度式美術の東漸に就いて」なる題目を選ばしめ、同時に先生の其の後の美術史への態度を決定した底流の源泉ともなつたわけである。先生は希臘印度式美術の中央アジアを經由して支那・朝鮮及び日本に及ぼした影響を説かれたのであるが、かゝる視野と態度は卷末附載の講義ノートたる「東亞古代美術總説」に於いてより普遍化されて示されてゐる。主として支那の美術文化を中心とされたものであるが、これは西方との關係は勿論北方との關係を明らかにしてはじめて理解されることを主張されたものである。この態度は即ち十九世紀末より今世紀にかけて各國より行はれた東亞各地の考古學的探檢調査と相應じた東西兩文化交流の問題に研究の方向を歸一せしめた當時の東洋學界の影響でもあつた。先生はさうした學界の風潮に身を投じて而も又見事にその流れに棹さされた雄でもあつた。

先生の美術史が希臘印度式美術から出發したことは當然法隆寺への關心と相應するものであり、従つて又法隆寺に關係するものが本書所載の論文中その大半を占めてゐるのも宜なるものがある。而もその當事者をあれほどまでに尖鋭化した法隆寺論争の渦を極めて手際よく避けつゝ、かへつて「法隆寺の建築様式と支那漢六朝の建築様式に就いて」なる論文に於いては、法隆寺建築様式を高句麗古墳の壁畫、六朝の石窟にその類似を見出し、更に又漢代の石闕・明器にまでその様式を溯らしめて、法隆寺の雲斗・雲形版木の如き「空想的形式」(fancy form)を漢代から六朝に至る

建築の一般趣向であることを論證せられてゐるあたり、法隆寺論争問題に嫌悪さへ感ずる者にとつては正にギリシヤ彫刻にも似て明るく氣持よいものである。又『日本美術史研究』所收論文が多種多岐であつたに對して本書には明確に一貫された美術史への態度と方向が看取されたのであるが、「感鑿考」は題名の如き特殊な玉器を取り上げられて石器と玉器との關聯を論考した一論であり、其の外上述紹介した關係論文以外のものも二三收められ何れも興味深いものがある。

先生が總長就任直前まで講ぜられたさきの「東亞古美術綜説」を聽講し得た自分は、今本書に收められたそれを活字の上にも再讀した時、あの時と同じくそのすぐれた感覺と豊かな文才により創作された作品に對する如く所論の明快さに魅せられたのである。然しそこにこそ學ぶものにとつては大きな陥穽があることを看過してはならない。先生の學風に魅せられるがまゝに私淑して易々としてその道を迎へる時先生の背後にかくされた陥穽に陥るのではあるまいか。先生の學は破綻なき才と感覺の學である。それだけに資料の學を學ぶ者は先生により完成された先生の學問を先づ批判せねばならない。そこにこそ先生の學問の眞にして忠實なる理解があると思ふ。そのことは又その著作が今日の吾々に對して有するモニュメンタルな意義と價値を示す所以である。

要するに東洋美術史研究はギリシヤ美の感覺もて支那古美術品に對されたのであるがその點先づ今日に於いては大きな問題が見出されるわけである。文中に排されてゐる三代の古銅器に支那古

代美術精神の凝縮したものを追究する今日に於いては。(定價七圓五拾錢 庶右發行會發行) (澄田正一)

彙報

昭和十七年十月史學科講義題目

正科目

國史

普通 西田教授 國史概説(第一部) 二

中村助教 國史概説(第二部) 二

特殊 西田教授 國家と歴史 二

藤助教 中世の社會 二

柴田講師 神道史の諸問題 二

東伏見講師 飛鳥奈良時代の文化 二

魚澄講師 室町時代の文化 二

吉田講師 日本近世史の特殊問題 二

藤井講師 明治維新史 (一〇〇) 一

實習 藤助教 日本教學史の問題 一

演習 西田教授 日本文化史の問題 二

東洋史 那波教授 東洋史概説(第一部) 二